

氏 名	イ 李 ヒ 禧 スク 淑
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 211 号
学位授与の日付	平 成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学位論文題目	近現代におけるコリアンの移住と新たな社会空間づくり

論文調査委員 (主 査) 教授 石川義孝 教授 石原 潤 教授 金田章裕 助教授 杉浦(田中)和子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、近現代におけるコリアンの移住プロセスを明らかにすることにある。主に国外移住を中心に論を展開するが、部分的には国内移住をも含んで考察している。ここで言う移住プロセスとは、単なる移動のフローを指すのではなく、また特定の時期の限定された適応の状態を指すでもない。論者が着目するのは、移住民がさまざまな社会システムにさまざまな仕方に対応して行く、移住以前から定住に至るまで、さらには今日も進行中の長期にわたるプロセスである。論者の関心は、他の人々との複雑な相互依存の連鎖で結ばれており、政治的实践を行いながら新たに社会空間を作り上げて行く、移住民の姿を取り出すことにある。本論では、移住プロセスのなかでの相互依存の関係がどのように、また、なぜ変化するかが示される。このような関心の背後にあるのは、移住民の日常の営みや文化が、意識的に選択され表象の場で交渉されるプロセスであるという問題意識にほかならない。また、移民の日常生活は、社会、経済、文化、政治が個別に独立してなされているのではなく、むしろそれらは部分として緊密に関わっており、全体のコンテキストのなかで意味を持つと考えられる。そこで本研究では、それらを可能な限り総合的に捉えることを意図している。

人のフローは個別性をもつが、特定の時期に特定の方向へと大量に流れることがしばしば目撃される。この意味で、近現代におけるコリアン移住は、homeland exodus (国外移住) と rural exodus (農村からの国内移住) として描くことができる。この二つは決して別々のものではなく、有機的に関わっており、概ね同時に進行してきた。どのような移住民も時間と空間のなかの特殊な諸条件によって生み出され、また規定される個別性を持つ。しかし、こうした個別性は、政治経済的な権力関係の越境的な空間形成における、より一般的な傾向のなかに照らして吟味する必要がある。

そこで第一章で論者は、20世紀におけるコリアンの国外移住の量産を、新地政学(批判地政学)的視点とノマディズムの実践と言う観点を接合して考察し、さらに、移住プロセスの後期段階において欠かせない市民権問題をも検討する。朝鮮(韓)半島を巡る対外的な人のフローを見ると、植民地時代における日本人の進出や中国人の流入があったものの、1980年代後半までは一方的なコリアンの出移民で特徴づけられる。日本との植民地関係によって、日本と満州へのコリアンの離散(diaspora)が促進されるが、それはまさに韓半島の国家横断化時代の幕開けでもあったと論者は考える。また、解放以降は、韓国のアメリカ合衆国への従属関係によって移住が促進されたと考える。前者では帝国主義に基づく、後者では経済のグローバル化による世界システムの結びつきが、それらを規定していたことは言うまでもない。

コリアンの移住に際して、論者が特に注目するのはコリアンの「ノマディク(移住志向)的な心性」(nomadic mentality)の働きである。論者は、その心性は本質的なものではなく、むしろ特定の時空間において触発されたものであるととし、そこに、巨大な社会の揺れ動きに対してノマディズムで応じてきたコリアンの政治(politics)が示されるとする。

ところで、在日コリアンは「永住者」として、アイデンティティの複合性、重層性の下に生きつつあるが、いまだその地位は「国籍」の枠内で調整されているのが現実である。最近、地方参政権の要求や新たな文化の構築に見られるように、彼らは、ローカルな公共圏のなかに、沈黙を破って主体として登場しようとしている。そこで論者は、新たな「市民権」の制

度化によって、矛盾する二つの要求、つまり差異（個別のアイデンティティ）への権利と平等への権利とを満たしうる条件を、どのように作り上げるかが市民社会の鍵であるとする。

本論文では、移住（在日）コリアンによる新たな社会空間づくりの体现を考察するために、第二章から第五章までを、現地調査にもとづく実証研究に充てている。そこでは、移住コリアンによる日常生活の営みを、政治的实践という観点から検討を進めている。

まず、第二章では、在日コリアンの求職行為を通じて、そのネットワークの動的で多様な像を提示し、在日コリアンの社会経済的変容を明らかにしている。分析の結果、求職ネットワークは、家族、親戚、同胞の知人のようなコミュニティ内でのインフォーマルなネットワークへの依存が再確認される一方、その程度は男女および世代によって異なることが明らかにされた。とくに女性や新世代による、コミュニティを越えて拡張されたフォーマルなネットワークは、教育水準の向上のような単なる個人のレベルでの変化のみならず、日本社会の制度的な規制の緩和によっても促されている。このように、在日コリアンの経済は定住国に社会的に埋め込まれていくことが認められる。したがって論者は、定住エスニック集団のネットワークの把握には、同胞ネットワークへの強い依存という一面的なとらえ方から脱却し、そのネットワークの多様性と動態への考慮が求められるとする。

第三章で論者は、従来の労働市場の議論が、局地化された社会的相互作用のみを強調し、ローカルを越える外部との関係への考慮が不十分であったのに対し、ローカルばかりでなく外部との連携にも着目し、大阪のコリアン集住地域における労働市場とエスニシティとの関係を探っている。その結果、まず、ローカル労働市場は、職住近接性、場所ベースの同胞ネットワークへの依存、そして一定の地域内での居住固着性といった生活空間のローカル性（localness）を通じて作り上げられ、強化されてきたことが認められた。また、このローカル市場は、人や情報のフローによる外部的関係、すなわちトランスローカルまたはトランスナショナルなつながりを通じても組成されることが確認された。したがって、エスニックなローカル労働市場は、ローカルおよびトランスローカルな特性の相互作用により生成、再生産される社会構造であることが認められ、エスニック特有の労働市場のダイナミックなプロセスが提示された。

第四章で論者は、パフォーマンスがエスニック・アイデンティティの構築において重要な役割を果たすという視点から、文化パフォーマンス、アイデンティティ、空間の三者の関係を論ずる。このような論者の視点は、パフォーマンスを単なるイベントとして、またはそれが人々をどのように映し出すのかがという点に注目してきた従来の研究とは異なっている。論者は大阪の生野におけるコリアン祭りの定性的分析を通じて、アイデンティティがどのように構築され、そのプロセスがコミュニティ内およびコミュニティ間の利害関係の調停によってどのように組成されるのかを考察し、特に差異よりも類似性を考慮することで再組織化される文化の潜在力を論じている。このような動的な関係の下で、祭りが特定のインフォーマルな公共圏（public sphere）を提供し、そのなかで、社会的論理やアイデンティティが争われることが示唆されている。

第五章で論者は対象を国内移住に変え、国家の公共事業にともなうコリアンの移動を通じて、一氏族マウル住民の新たな社会空間づくりを探っている。韓国では1970年代以降国土総合開発計画の一環で行われたダム建設にともない、相当数の氏族マウルが解体され、非自発的な移住民を生み出してきた。本稿では、そのような一事例を通じて、住民の一部が移住先を選定し、その新しい場所に集団移住といった形で定着していくプロセスを明らかにしている。彼らは、経済的な側面を新環境に適するように素早く変容させながら、他方コミュニティにおける伝統的文化要素を保持していくと言う、社会空間づくりを目指している。本章の事例は、自然部落から再建した村に氏族ネットワークを原形に近い形で移植し、より文化的衝撃を和らげ、より短期間に新環境に慣れた点で、他の国内移動および国外移動とは異なっている。しかし、一方で、国家の公共事業により、一定の経済的補償があるとは言え、移住を余儀なくされ、母村が水没される経験をしたのであり、まさに、帰れない故郷をもつ国内の離散ともいえる。また、新たな社会空間づくりに向かっていること、および近隣との交流を通じて社会空間が広がっている点では、国際移住とも共通する面があることが指摘される。

最後に論者は、以上の各章において共通に見られる移住コリアン社会の特徴を、人々との相互依存関係のなかで新たな社会空間を作っていくプロセスに見出している。論者によれば、そこで見られる彼らの日々の営みや文化は、所与のものでもなければ、偶然の産物でもなく、それは意識的な選択や表象の場で交渉される、ミクロな政治の実践に他ならない。とりわけ旧植民地関係に由来する在日コリアンにおいて、政治的实践は必ずしも対抗ナショナリズムという方向に向うわけではな

い。その日常生活には、すでにコミュニティの内外を問わず、人々との相互依存関係が埋め込まれておりその中で絶えず交渉しながら、地域や国家を横断する社会空間へと自らを展開させていると言うのである。

論文審査の結果の要旨

在外コリアン（韓国・朝鮮人）の総数は、560万人を上まわると推計されており、コリア（韓国・朝鮮）は、アジアにおいて中国、インドに次ぐ移民排出国であった。戦前の移民の多くは、日本、満州、及びロシアに向かい、戦後のそれは主に合衆国へ向かった。これらコリアンの移住過程とその現状は、近年の学問的関心の焦点の一つとなっており、特に在日コリアンや在米コリアンについては、多くの研究成果がある。一方、コリア内部での移住についても、特に1970年代以降の経済の高度成長下に、日本をはるかに上まわるスピードで、rural exodus とまで表現される向都離村現象が起り、これについても一定の研究成果がある。

そうした中であって、本研究は、①コリアンの国外・国内移住の両者を視野に入れ、②英語圏における移民研究の動向を一定程度踏まえつつ、③移住を単なる人の流れと見るのではなく、定住地での社会空間づくりをも含むプロセスと見なし、④社会・経済的側面だけでなく文化的側面をも重視し検討すると言う点に、特徴が認められる。

本研究は、三つの部分から構成されており、まず第1章で戦前・戦後にわたるコリアン移住の概観を行い、次いで第2～4章では在日コリアンの社会・経済・文化にわたる諸問題を扱い、最後に第5章で国内移住の事例研究を行っている。

第1章では、新地政学（new geopolitics）ないし批判地政学（critical geopolitics）の視点で戦前・戦後のコリアン移住を解釈するとして、戦前については、植民地下であって、日本帝国主義の空間統御の下に、日本人植民者及び中国人労働者の朝鮮流入と関わりながら、朝鮮人の日本及び満州への移住のいくつかの波があったと論ずる。また戦後については、世界システムに連なる新植民地的従属関係の下に、韓国人の合衆国移住の熱波が生じたとする。ただし、本章の記述内容の多くは、既往の研究に負っており、オリジナリティは視点の新しさに限定される。また、新状況に直面してコリアンがしばしば移住という選択を行う要因として、論者は、歴史的に形成されたノマディック（移住志向的）な心性を挙げているが、これについてはもっと説得的な論証が望まれる。さらに本章の最後では、在日、在米のコリアンの近況を比較しつつ、今日的課題として「市民権」の問題を論じているが、これについてもより精緻な検討が望まれる。

第2章では、大阪大都市圏居住の在日コリアンに対する大量のアンケート調査に基づき、求職の際に彼らがどのようなネットワークを利用したかを分析し、親族や同胞などのインフォーマルなネットワークが依然として強く機能しているが、他方では若い世代や女性においてフォーマルなネットワークの利用が進んでいるという、興味深い結果を得た。論者はこれをもって、在日コリアンが日本社会への新たな「埋め込み」の段階に達していると考えている。

さらに第3章では、大阪府在住のコリアンに対する詳細なアンケート調査と、聞き取り調査などによるデータに基づき、大阪におけるエスニックな局地的労働市場のありようを多面的に検討した。その結果、コリアンの最大の集住地である生野区を中心に、同胞との情報交換に依存し、職住を近接させ、居住の固定性の強い、典型的なエスニック労働市場が存在することを明らかにすると共に、それがトランスローカル・トランスナショナルな展開をしている事をも明らかにした。論者は、当該労働市場が、この両者の性格を兼ね備える点で、Sassen らが論じた欧米のエスニック労働市場と共通すると言う。

続く第4章では、同じ大阪の在日コリアンを扱いながら、経済的側面ではなく、文化的側面に焦点を当てている。すなわち、生野区での住み込みによる参与観察とインタビュー調査を通じて、生野のコリアン祭りが、在日のアイデンティティの形成や猪飼野の空間をめぐる争いに関して、どのような意味を持ったかを説得的に論じている。論者によれば、コリアン祭りは、曲折を経ながらも、韓国の民俗芸能と日本の祭りとの模倣により「発明」されたイベントであり、母国のコリアンでもなく、日本人でもない、在日コリアンのアイデンティティ形成に寄与したのであり、またコリアン祭りの毎年の挙行が、コリアンの「流動の空間」（space of flow）を広め、彼らの「場の空間」（space of place）における存在感を強めたと言う。いずれも興味深い指摘である。

最後の第5章では、コリアンの国内移住の事例として、ダム建設にともない半強制的に移住を迫られた氏族マウル（同族部落）成員の集団移住について、移住前後のムラでのフィールドワークに基づいて論じている。その結果、集団移住した氏族成員は、経済的には新しい環境に巧みに適応する一方、伝統的な氏族文化を基本的に維持することに成功した点を、詳細

に明らかにしている。しかしながら論者は、彼らの移住を、一定の補償があり、移住先の選択の余地があったものの、帰るべき故郷を失った現代の離散であるとする。

以上から判断すると、本研究の最大の貢献は、在日コリアンの実態調査を通じて、移住民社会の特性とその変容の諸相を、経済・社会的側面（求職、営業、居住、移動など）と、文化的側面（祭り、アイデンティティなど）とにおいて捉え、いくつかの興味深い知見を得た点に求められよう。これらは、大量のアンケート調査や住み込みによる参与観察と聞き取り調査の結果を、論者自身の分析によって明らかにしたものであり、オリジナリティは高いといえる。

貢献の第2は、国内移住に関しても、詳細な実態調査に基づき、移住民社会の社会・経済的及び文化的変容（論者の言葉を使えば「新たな社会空間づくり」）を明らかにした点であろう。ただし、対象の事例はユニークさにおいて貴重ではあるが、*rural exodus* とまで表現される韓国国内の大移住の流れから言えば、やや特殊な事例であるとの印象は否めない。

これらに対して、コリアンの全移住を、新地政学やノマディックな心性で説明しようとした試みは、前述のように未だ充分成功しているとは言えず、論者の今後に残された課題であろう。なお、本研究全体を通じて、論者は、欧米、特に英語圏における近年の社会理論、文化理論、及び新しい地理学の動向に深い関心を示し、それらの概念やフレームワークを導入しようとする意欲が、強く認められる。ただし、これらは常に成功しているとは限らず、未消化なまま提示されている場合も見うけられる。また、日本における在日コリアン研究や地場産業論などの蓄積に対する配慮の点でも不十分さが認められる。これらの点に関して論者のさらなる研鑽を望みたい。

このように本研究はいくつかの問題点を含んではいるが、コリアンの全移住過程を視野に入れようとした意欲と、在日コリアン及び国内移住集団についての、いくつかの興味深い知見をもたらした点において、高く評価しようとする。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2002年2月26日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。